

## 狸 8 狸の火 = = = 猪・鹿・狸より

狸はやはり火を点すと言う。青いともまた赤い色をしているとも言って、きまっていないようである。しかし一方には、狸の火は赤く、狐の火は青く、天狗の火は赤くて輝きがあるなどと尤もらしく語るものもあった。山の陰に入っても、木立の下へかくれても、同じように見えていたと言うものもある。

長篠の医王寺から、横山の方に向って、山を越して来て、長篠の本街道へ出る辻のあたりは、よく狸が出て嚇す処と聞いたが、またそこで火を点すとも言うた。

山路をだらだら降って来て、本街道の辻へ出ると、前が寒狭川の広い谿で、谿の彼方に、大海や出沢の灯がちらちら見える。さらに行く手には横山の村の火も見えた。狸や狐の火でなくとも、淋しい感じのしたものである。また時とすると、遠くの雁望山（かんぼうやま）のあたりへも、ちらちら見えることがあった。自分が小学校を卒業する年には、夜学に通って毎夜その道を通ったもので、坂を降って来て向うの火を見た時、はっとしたことはある。そうかと言うて一度もそれらしく思うものを見たことはなかった。

あるいはまた、ちょうどその辺りから、怪しい人影が、後や先に随いて来ることがある、こっちが止まれば向うも止まり、急げば急いで、村の入口まで来て消えるなどとも言うた。現にそうした経験をしたものが、自分の訊いただけでも何人かあった。某の男が遇った時は、村の入口の橋まで来ると、どんどん脇へそれて、川の中へ入ってしまったと言うた。

自分が子供の頃だった。そこで怪しいものに遇ったと言う男が、夜中に大戸を叩いたことがある。近所の村の物持ちの主人だった。何でもそこへかかった頃から、前に立って影のように歩いているものがあった。村の入口へ来てもなかなか姿を消さないでついにお宅の前まで来たと言う。これからまた山を越して帰る気にはなれぬから、どうか泊めてもらいたいと言うていた。それもやはり狸の悪戯と言う。

あるいはまた、そうした場合、狸ならば最後に姿を消す時、えらい音をさせて消えるから判るとも言う。